

如来様の直説に聞き入っていらっしゃる親鸞聖人

ご讃題 (Ref 『一念多念文意』全書 P2-604-5、註 P678)

「もん ごとみょうごう聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり、きくといふは、本願をききて疑ふころなきを聞といふなり、また、きくといふは、信心をあらわす御のりなり、

一、忘れられない中陰の間の出来事

「既に前住の三回忌も終え、今また前坊守亡き後は、われらが上には直接、ごくらくむ いねはんがい極楽無為涅槃界が広がるばかりとなりました。

そこはお名号のふるさどですから、いつでもどこでもお念仏の都度、聞こえて下さる如来様直々の御喚び声の中に、父も母も居て下さると聞かせて戴いております。

そのようにお聞かせ下さる親鸞聖人ご自身が、「本願の名号をきくとのたまへるなり」と直々に如来様の仰せに聞き入っていらっしゃったのだとお知らせに与ったのもこの中陰の間のできごとでございました。」

これは前坊守満中陰の挨拶状の一節です。

この間、「お母さんとお別れになって淋しくなられましたね」とは、会う人毎にお聞かせ戴く言葉でありました。

けれども、実は、それとは反対に、中陰の間に、私はとても晴れやかな世界に導かれることになっていたのです。

ご讃題の御文は、如来様の仰せをお聞かせに与ること一つで私たち凡夫が間違いなくお浄土に迎え取られお救いに与る阿弥陀如来の第十八願成就のご文について親鸞聖人ご自身が和語でやわらげ親しくお説き下さっているご文であります。

このご文の深いお心に遇わせて戴いたのがこの中陰の間のできごとだったからです。

六月十二日は、忘れられない一日でありました。

その日、私は、でんし殿試の口頭試問に臨んでおりました。

もんしゅ問者の促しに答えて「もん ごとみょうごう聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり」とまず頂戴しなければならなかったこととあります」とお応えしますと、一瞬、問者の和上様方もご一緒に試問のお部屋の雰囲気や和らぐのを覚えました。

期せずして、私はこれは親鸞聖人ご自身がまぎれもなく如来様の直説に聞き入っていらっしゃるお姿であるとお知らせに与っていたのです。

「きくとのたまへるなり」の十文字に浄土真宗の宗教哲学がよって来たる泉の淵源を垣間見る思いがしたからです。

続いて、問者梯 實圓和上から頂戴した口頭試問の主題は、「きくといふは、信心をあらわす御のりなり(聞の第二釈)」でありました。

「きくことがそのまま信心であるような信心というのはどのような信心ですか」、そのような趣旨のお尋ねだったと記憶しております。

私は、るるお答えしつつも、聞の第二釈では、「きくといふは、…疑ふころなきを聞といふなり(第一釈)」の無有疑心と峻別して応えなければならぬことに気付いておらず、もどかしさを覚えておりました。

和上様もお顔を紅潮されながら、質問を言い換え差し替え展開して戴いたのですが、…とうとう、的確なお応えができないうちに、

「はい、結構でした」との寮頭和上の御言葉で幕が引かれました。

私は、「本日はまことに有難うございました」と感激の言葉を申し上げて退出したのであります。

問いとお答のやりとりのその一つ一つがまるで歌舞伎の舞台上の出

来事であるような不思議な感動のひとこまでありました。

数日後、「この機会に「御のり」の用法について調べてみるとよいでしょう」というあるお方のお勧めのままに、その用法を調べてみました。

するとどうでしょう、「御のり」は、銘文に三例、一多証文に七例、唯信鈔文意に六例あって、その他には見当たりません。これらは、宗祖が八十五・六歳の年代に認められたお聖教ばかりであり深い宗教体験に裏付けられたものであります。ここで、「御のり」とは「法則」だと人づてに聞くところではありますが()検索結果で最も頻出する用例は、

註:一多証文には「則」について、自然にさまざまのさとりをすなはちひろく法則なり・法則といふは、はじめて行者のはからひにあらず、…一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とは申すなり。」とある。漢和辞典では「法」はさだめ、のつとるの意と示されている。

一、阿弥陀如来の仰せであるとするもの

例 誓ひたまへる御のりなり、

例 十方の衆生にあたへたまふ御のりなり、

二、釈尊の仰せであるとするもの

例 釈尊説きたまへる御のりなり、

例 如来説きおきたまへる御のりなり、

等々に見る如く、如来様より賜った御言葉という含意があると認められるではありませんか。

すると、ご讃題のご文の性格は「のたまへるなり」にはじまり、「御のりなり」で終わっていることがわかります。

これは、第十八願成就文の名号聞信の構造そのものについて、親鸞聖人ご自身が如来様直々のお言葉として頭を傾けて聞き入っていらっしゃる尊いお姿を示すものに他ありません。

浄土真宗のみ教えは親鸞聖人の独自の宗教体験が、弥陀の本願力回向の直説によって成り立っている証拠を物語るものに他ならないのではなかったでしょうか。

リビングライブズー「如来様の直説に聞き入っていらっしゃる親鸞聖人」

なるほど、私たちがついにお救いに与るのは、阿弥陀如来の本願の名号の不思議によるのであります。

お名号のいわれを「きく」というのは、如来様の仰せをあるがままにお聞かせに与り、その他の私のはからいを付け加えないことが、実は、浄土真宗でいう本願力回向の信心なのだというロジックであります。

殿試から十日後、私は行信教校の一室に梯和上をお訪ねし、「ご讃題の御文は、親鸞聖人ご自身が自ら如来様の直説に頭を垂れ聞き入っていらっしゃるお姿だと頂戴できるのですが」とお尋ねしますと、

和上は、にこやかに「そうです」とおっしゃったのであります。

何という不思議なひと時だったことでしょうか。まばゆいばかりの光輝くただ中を私がお部屋から失礼したことは申すまでもありません。

私にとり浄土真宗の宗学に集中できるまたとないひととき、それが母の中陰でありました。

ですから、「既に両親がお浄土に迎え取られた後は、われらが上には直接、極楽無為涅槃界ごくらくむいねはんがいが広がるばかりとなりました。

そこはお名号のふるさとですから、いつでもどこでもお念仏の都度、聞こえて下さる如来様直々の御喚びよび声の中に、父も母も居て下さると聞かせて戴いております。」というの、母の中陰で頂戴したまぎれもない宗教体験だったと顧みることであります。

更に、名号聞信による凡夫往生の道行は、宗祖が如来様直々のお言葉としてお聞かせに与られた尊いお姿に基づいていたのだと初めてお知らせに与った忘れられない出来事に出遇うた時節でもありました。合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 リビングらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六	
☎-♪・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥	

平成二十一年六月二十八日初版発行、二十一年七月二十五日 四訂版 2